令和7年度　学校評価総括表　　【伊丹市立桜台小学校】

教育目標	心豊かでたくましく、自ら学ぶ意欲をもつ児童の育成　～ウェルビーイングの向上をめざして～
重点目標	(1) 多様化する子どもたちに対応する未来志向の教育の推進 (2)「縦の連携」の推進 (3)「横の連携」の推進 (4) 健やかな体の育成と健全な食生活の推進 (5) 生徒指導、学級・学年経営の充実 (6) 教育環境の整備等による教職員の働きがい改革と学校安全の充実

施策	実施施策の目標	重点項目	具体的施策	達成目標	自己評価	成果と課題	改善策	学校関係者の評価
学校教育	知・徳・体の調和のとれた児童・生徒の育成 「確かな学力」の育成 ①授業改善 ②誰一人取り残さない取組 ③学校・家庭・地域の連携 ④情報活用能力の育成 ⑤英語教育の充実 ⑥デジタル化の促進	①②④研究を中心とした授業改善により、誰一人取り残さない取組及び情報活用能力の育成 ③学校・家庭・地域の更なる連携 ⑥デジタル化の促進	・朝学習を復活させる。 ・毎週月曜日に朝読書を実施したり、週末読書の宿題を出したりすることで読書量を増やす。 ・毎週水曜日、文章を読んで問題を解くことに特化した「国語タイム」を実施し、読解力を育む。 ・週1回さくらタイムを放課後に実施する。 ・3年生以上はさくらノートを活用するなど、家庭学習の推進を行う。また、さくらノートコンクールを実施し、学習意欲を高める。 ・研究で授業の振り返りを重視し、自分の考えを書く活動を実施する。 ・授業の中で、ペアなどで自分の考えを伝え合う、話し合いの場面を設定する。 ・全学年でCRT（国・算）を実施する。 ・家庭での読書、長期休業中の貸出、読書月間の推進、図書委員会活動の充実、掲示物、電子図書の活用、読書の記録により読書環境を充実させ、読書習慣付けを進める。 ・学期初めに「桜っ子のきまりふりかえり」に取り組ませ、けじめある生活態度を養い、学習に集中できる環境づくりをめざす。 ・1週間の生活チェックシートを活用し、家庭と連携しながら生活習慣を見直させる。 ・架け橋期プログラムへの意識改革 ・必要な場面でICT機器を活用し、児童の学習意欲を高める。	・児童アンケート「授業はわかりやすい」が90%以上 ・教育課程部を中心にさくらタイム、放課後学習を計画的に実施し、学力補充に努める。 ・「めあて」と「振り返り」を相対させ、山場を意識した授業づくりを行う。 ・全教科でワークシートや授業の振り返りの記述、発表の内容などに、考えの深まりが見られる。 ・授業の中で、ペアトークを取り入れる。 ・年度末にCRTテスト（国語・算数）を実施し、その結果を分析し、授業改善に生かす。 ・図書ボランティア活動を立ち上げる。 ・児童アンケート「本を読んでいる」の回答で、週1時間以上読んでいると回答する割合が70%以上になる。また、保護者アンケートの「家庭で読書ができる環境を作っている」と回答した割合が70%以上になる。 ・家庭学習の低学年30分、中学年60分、高学年90分という目標時間を達成する。 ・架け橋期プログラムに向けたさくらだいこども園との連携。 ・ICT機器（タブレット端末）使用における質の向上。	A	・児童アンケート「授業はわかりやすい」が89%だった。 ・教育課程部を中心にさくらタイム、放課後学習を計画的に実施し、学力補充に努めた。 ・各教科における「書く」「話す」活動を整理し、授業に取り入れられるようにした。振り返りの文型を提示し、学校全体で取り組めるようにした。 ・ワークシート等を用いて振り返る取組を、研究を中心に進められた。自分の考えを記述してから発表することで、児童間に考えの深まりが見られた。 ・授業中、教師と児童の1対1ではなく、ペアトーク等の関わりを積極的に取り入れられた。より話合いの質を高める。 ・読書環境充実に向け、図書ボランティア活動を立ち上げた。 ・委員会・ボランティアにより、本に親しむ機会が増えた。 ・教職員アンケートで「読書習慣付けを進めることができた」と回答した割合が89%と、昨年度比で31ポイント上昇した。 ・児童アンケート「本を読んでいる」の回答で、週1時間以上読んでいると回答した割合が922%と、昨年度比で16ポイント下回った。 ・家庭学習高学年目標時間90分達成割合は51%だった。 ・1年生と5歳児とで交流できた。学校図書館の利用等。 ・必要な場面で適切にICT機器（タブレット端末）を使用できたが、学校全体で使い方についての整理が必要。 ・保護者にもきまりについて理解いただけるよう家庭と連携しながら啓発する。	・引き続き、基礎、基本の定着のための方策を図っていく。（授業・朝学習・漢字算数小テスト・さくらタイム・放課後学習等） ・家庭学習の重要性・習慣化について、事ある毎に啓発する。 ・アシストシートにより、児童の弱点補充を行っていく。 ・研究を中心に、効果的な指導方法を考え、全学年で実施する。 ・単語での発表を良しとせず、主張・理由・根拠を大切にした発表を、今後も学校全体で取り組んでいく。 ・引き続き、授業中に話す機会を保証することで、児童のより確かな理解へとつなげる。 ・朝読書の時間を確保する。 ・学校司書と連携・協働しながら多様な選書を促していく。 ・読書の良さ、楽しさを伝える活動を通して家庭読書を推進し、読書の習慣作りに努める。 ・引き続き、毎学期に行っている「桜っ子のきまりのふり返り」を持ち帰らせ、家庭でも話し合いができる機会を設ける。 ・さくらだいこども園と更に連携を図る。 ・インターネットやSNSの使い方等、情報モラルについて指導する。	・朝学習が復活したのは、とても良い。 ・朝学習の読書は継続してほしい。 ・引き続き、本に触れ合う機会を確保してもらいたい。 ・親子で学校図書館を利用できる機会のようなものがあればと思う。 ・学力向上のPDCAサイクルの好循環化を実感されて自己評価Aをつけられたと思う。今後も課題を一つ一つ改善し高評価を維持してほしい。
	「豊かな心」の育成 ①道徳教育の推進 ②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の推進 ③不登校の児童生徒やその保護者への支援体制の充実 ④体験活動等の実施	②いじめ等の未然防止、早期発見、早期対応に向けての組織的な取組の更なる推進 ③不登校の児童やその保護者への支援体制に対する意識改革及び抜本的改善	・教職員一同、いじめに対するアンテナを高くし、生活指導を中心に組織的に対応する。 ・いじめアンケートのサインを見逃さず、早期対応を図る。 ・欠席1日目でも、積極的に家庭訪問する。 ・児童・保護者と良好な関係を構築する。 ・不登校対策支援員及びふれあい相談員と密に連携する。 ・気になる児童が出た場合、早急にミニケース会議を開催し、管理職・学年・養護教諭等と校内で情報共有及び対策を練る。 ・不登校対策連携会議を開き、学校・SC・SSWとの情報共有及び連携を図る。 ・保護者に問題がある場合、こども福祉課等、関係機関との連携を密にし、粘り強い働きかけを行う。 ・校内サポートルームを立ち上げ、支援体制を充実させる。	・教職員アンケート「1日の欠席でも理由により家庭訪問を行うとともに、関係機関との連携を密にし、保護者への粘り強い働きかけを行った。」と回答する割合が80%以上になる。 ・児童アンケートにおいて、「学校へ行くのが楽しい」と回答した割合が75%以上になる。 ・保護者アンケートにおいて、「子どもは、楽しく学校に行っている。」と回答する割合が85%以上になる。 ・ミニケース会議を、必要に応じて開く。 ・不登校連携会議を、月1回以上開く。 ・校内サポートルームを立ち上げ、学級担任が必ず顔を出し、児童への学習指導を行う。	B	・教職員アンケート「1日の欠席でも理由により家庭訪問を行うとともに、関係機関との連携を密にし、保護者への粘り強い働きかけを行った。」と回答した割合は85%だった。 ・児童アンケートにおいて、「学校へ行くのが楽しい」と回答した割合は70%だった。 ・保護者アンケートにおいて、「子どもは、楽しく学校に行っている。」と回答する割合は91%だった。 ・児童アンケートにおいて、「困ったこと（悩みや不安なことなど）があれば、友達や先生に相談できる」と回答する割合は57%だった。 ・いじめアンケート等のサインを見逃さず、早期対応できた。 ・必要に応じてミニケース会議を開催し、関係者で情報共有を行うとともに、関係学年を中心に対応することができた。 ・不登校連携会議を、月1回以上開催し、SC・SSWと連携して対策を練ることができた。 ・不登校対策支援員やふれあい相談員と連携をして、組織的な対応を行った。 ・校内サポートルームでの学級担任による児童への学習指導については、徹底できないことがあった。	・「生徒指導提要」を各学年熟読し、共通理解を図る。 ・児童の様子を注意深く観察して、共通理解、児童理解及び保護者との信頼関係構築に努める。 ・家庭とのつながりを深めるとともに、不登校対策連携会議や職員会などで職員間の共通理解を図り、状況を見極める。 ・教師に相談しやすい環境になるよう、あいさつなどを通して教師側からも積極的に声をかける。 ・よりフットワーク軽く生徒指導案件に対応できるよう、生徒指導担当加配・不登校対策支援委員・ふれあい相談員の配置を強く希望していく。 ・親への指導に向けて、こども福祉課や川西こども家庭センターと強く連携する。 ・校内サポートルームにおける不登校児童に対する支援を更に充実させる。	・不登校や長期欠席者への対応については、先生方だけでは厳しいため、専門家に入ってもらうことも必要ではないかと考える。 ・不登校児童を生む原因が一面的ではなく、学校内外関連団体との緊密な連携に取り組まれている事に感謝する。取組により不登校児童が登校復帰できることを心より願う。
	「健やかな体」の育成 ①児童生徒の体力向上の促進 ②魅力ある部活動の推進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	①児童の体力向上の更なる促進 ③発達段階に応じた健全な食育の推進	・領域のバランスを考えた体育の年間指導計画を立案し、運動に親しむ機会を増やす。 ・単元の基礎基本となる運動をサーキットトレーニングとして取り入れる。 ・主運動に至るまで、スモールステップで計画する。 ・2学期から3学期にかけて業間休みに耐寒縄跳びを実施する。 ・体育委員会主催でイベントを実施する。	・2学期から3学期にかけて業間休みに耐寒縄跳びを実施する。 ・児童アンケート「1日1回は遊んだり運動したりして体を動かしている」と回答する割合が80%以上になる。 ・体力調査で、全国平均を男女共に上回る。	B	・2学期から3学期にかけて週2回業間休みに耐寒縄跳びを実施した。 ・業間休みに体育委員会主催のイベントを実施した。 ・日々健康に過ごすための生活習慣作りができた。 ・児童アンケート「1日1回は遊んだり運動したりして体を動かしている」と回答した割合は74%だった。 ・体力調査で、全国平均を男女共に大幅に上回った。 ・食育を実施してはいるが、依然として残食率が高かった。	・授業では、主運動に繋がる運動をサーキットトレーニングで取り入れるなど、授業改善を行う。 ・授業改善のため、ワークシートや授業計画などの情報を積極的に共有する。 ・体育により親しむことのできるような行事を、体育委員会を中心に行う。 ・教師が積極的に関わり、外遊びに親しむ態度を育てる。 ・家庭と協力して、食に対する意識を高める。	・各学年でもミニ運動会や大縄大会等を開催するなど工夫しており、子どもたちは楽しんでいたと聞いている。 ・子どもたちにとって魅力のある取組を行うことで、体力向上につながると考える。 ・スマホ世代の子どもが知育/徳育/体育のバランスをとることが難しくなっている。(左記の)成果と課題のもう一段のブラシュアップにより運動能力の向上を願う。
	教育相談・支援体制の充実 ①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの活用 ③教育相談の充実	①キャリア教育の推進 ②スクールカウンセラー・スクールソーシャルワーカーの積極的な活用 ③教育相談の更なる充実	・キャリアパスポートに記入し、自身を振り返るとともに、次年度へと繋ぐ。 ・学校と密に連携し、SCによる授業やSSWによる家庭訪問等、積極的な活用を推進する。 ・気になる家庭とは、担任及び管理職による保護者面談を積極的に実施する。	・キャリアパスポートに記入し、次年度に送る。 ・不登校連携会議等で密に連携し、児童や家庭の実態に応じてSC及びSSWの積極的に活用する。 ・児童や家庭の実態に応じて、担任及び管理職による保護者面談を積極的に実施する。	B	・キャリアパスポートを年間3回（目標・半期の反省・年間の反省）実施し、次年度に送ることができた。 ・各学年におけるキャリア教育のカリキュラム等を見直していく必要がある。 ・不登校連携会議等で密に連携し、児童や家庭の実態に応じてSC及びSSWの積極的に活用できた。 ・児童や家庭の実態に応じて、担任及び管理職による保護者面談を積極的に実施することができた。	・愛着に課題のある児童については、引き続きSSWを積極的に活用する。 ・SCについては、現在男性のSCに来ていただいているが、本校では母親からの相談が多いため、ニーズを考慮して女性のSCの配置を強く希望していく。	・改善策に記されている様に、男性SCと女性SCのシフト配置を要望します。カウンセリング対象者に応じたSC配置が必要です。
	特別支援教育の推進 ①伊丹特別支援学校の活性化 ②特別支援教育の充実	②特別支援教育の更なる充実 ・インクルーシブ教育の推進に努める。 ・児童理解に基づく個に応じた合理的配慮の提供と基礎的環境整備を充実する。	・支援についてチーム（学年・学校）で対応するために、子どもの情報交換をこまめに行う。 ・毎月の部会で、児童の実態を吸い上げ、支援方法を検討する。 ・気になる児童にとって一番相応しい学びの場はどこか、校内教育支援委員会で熟議した上で、積極的に関係機関の訪問観察へと繋ぐ。 ・児童理解に基づく個に応じた合理的配慮の提供及び基礎的環境整備を充実させる。	・教職員アンケートにおいて「インクルーシブ教育について、職員間で共通理解し、各自の立場で推進している。」と回答した割合が80%以上になる。 ・特別な支援を必要とする児童の困り間を見逃さない。 ・必要に応じて市教委に巡回相談を迅速に依頼する。 ・教育支援委員会で、当該児童にとって相応しい学びの場について議論する。	B	・教職員アンケートにおいて「インクルーシブ教育について、職員間で共通理解し、各自の立場で推進している。」と回答した割合は75%だった。 ・担任による日々の児童の困り感等の情報から、児童の実態を共通理解できた。加えて、具体的な支援の手立てについても考えていく必要がある。 ・教育支援委員会で、当該児童にとって相応しい学びの場について十分議論し、通級や特別支援学級への転籍につなげることができた。 ・まだ埋もれている児童は多くいるため、必要な支援について引き続き検討する。	・担任一人で抱え込まず、積極的に情報共有を図る。特別支援COから関係機関を紹介したり、部会で支援の手立てについて検討したりする。 ・児童の報告は必要に応じて職員会議後等の時間を利用し、全職員で共通理解を図る。 ・より多くの目で、困っている児童を発掘するとともに支援策を検討する。 ・タイマー等、必要な教材が揃っていない学級及び専科教室には、積極的に設置していく。	・教育的インクルージョンは、教育における一つの理想型であるが、教育実施者に大きな負担と負荷が伴う。遂行にあたっては更なる外部専門家の支援参加を要請してほしい。
	教職員の資質向上 ①研修等の充実	①わかる授業を目指し、研究を中心とした教職員研修等の更なる充実	・授業力を高めるため、積極的に授業を公開し、授業研究を行う。 ・天王寺川中学校と連携し、岐阜聖徳学園大学の玉置教授の指導の下、9年間を見越して授業研究を行う。 ・教職員の自主研修（さくらカフェ）を定期的に行い、指導力の向上を図る。	・今年度は年4回の校内研究授業を実施し、授業改善に向けて検討する。 ・連携している天王寺川中学校の研究授業に足を運ぶ。 ・年3回、玉置教授の講話を聞く。 ・さくらカフェを定期的に開催する。	B	・年4回の校内研究授業を実施し、教職員の授業改善を推進できた。 ・天王寺川中学校とも連携を深めることができた。 ・さくらカフェでは、和やかな雰囲気のもと、山積する課題の解決に向けて、積極的に意見を出し合うなど、良い研修の場となった。 ・どの教室の扉も開いた状態にしておくことで、職員同士が授業を参観しやすい環境づくりを行った。	・年間で見通した計画を立て、無理のない範囲で研修を推進できるようにする。 ・これまでの成果を活かしつつ、系統性のある「話すための場づくり」を進める。 ・現在の本校の児童の実態に合わせ、研究に生かした研修としていく。 ・今後も職員間で積極的にコミュニケーションを取り、学び合える環境をめざす。	・引き続き、就学前施設（さくらだいこども園）とも積極的に連携してもらいたい。 ・授業力向上や教師間連携の観点から、扉が開かれた教室で互いに学級経営への工夫を学ぶ（まねる）取組はとても良いと思う
教育環境の整備・充実	学校を支える組織体制の整備 ①コミュニティ・スクールの充実 ②地域と学校の連携・協働体制の構築	①コミュニティ・スクールの更なる充実 ②地域と学校の連携・協働体制の強化	・学校運営協議会の更なる充実に努める。 ・学校運営協議会として、地域と一体となった事業を実施する。 ・学校だよりの発行及び学校ホームページへの掲載する。 地区コミュニティ協議会でも情報発信を行う。 ・学校ホームページ等で積極的に情報発信を行う。	・地域学校協働活動推進員及びCS地域コーディネーターを学校運営協議会委員として委嘱する。 ・学校運営協議会として、放課後学習を実施する。 ・学校だよりを月1回以上発行し、学校ホームページへ掲載する。また、地域にも積極的に情報発信を行う。 ・学校ホームページを積極的に更新する。 ・体育館前の大型モニターを情報発信に活用する。	A	・地域学校協働活動推進員及びCS地域コーディネーターを学校運営協議会委員として委嘱し、学校運営協議会の更なる充実に努めた。 ・学校運営協議会では、週2回放課後学習「さくらップジム」を実施することができた。 ・学校だよりを月1回以上発行し、学校ホームページへ掲載した。また、地区コミュニティ協議会の運営委員会において配布し、地域にも積極的に情報発信を行った。 ・学校ホームページ（校長先生の日記）を毎日更新し、校内の様子を中心に積極的に情報を発信した。 ・学校ホームページ等で情報発信を行う際の個人情報の取り扱いに注意する必要がある。 ・体育館前の大型モニターに、子どもたちの学校生活の様子をスライドショーで流した。	・学校運営協議会と地域学校協働活動の一体的な推進に努める。 ・放課後学習「さくらップジム」がより発展するよう、地域と更なる連携を図る。	・地域人材を活用する際には、連絡等より丁寧な関りを期待する。 ・地教行法の改正により平成29年4月1日より施行されたコミュニティ・スクール：学校運営協議会制度であるが、9年の年月(桜台小は平成28年に設置され10年)により当初説明された権能や果すべき役割が曖昧になってきたと感じる。
	安全・安心な教育環境の充実 ①学校園防犯訓練・防災教育の充実 ②子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校園施設の整備・維持保全 ⑤学校における働き方改革の推進	①②防犯訓練・防災教育の充実及び子どもの安全対策の推進 ③交通安全対策の推進 ④学校施設の整備・維持保全 ⑤働き方改革の推進	・防災訓練（火災、地震）・防犯訓練（不審者）を年1回実施する。 ・引き渡し訓練を2年に1回実施する。 ・安全点検を行う。（月1回） ・施設の老朽化や環境整備への対策を積極的に行う。 ・教育課程において、授業時間数を適切に管理し、余剰分は積極的にカットする。	・児童アンケートで「学校で安全に気をつけて行動している。」と回答する割合が90%以上になる。 ・保護者アンケートで「学校は、子どもの安全に関する適切な指導をしている」、「学校は、学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と回答する割合が90%以上になる。 ・各学年で授業時数の適正化を図る。	B	・児童アンケートで「学校で安全に気をつけて行動している。」と回答した割合は92%だった。 ・保護者アンケートで「学校は、子どもの安全に関する適切な指導をしている」と回答した割合は96%、「学校は、学習の場として子どもが活動しやすい環境が整っている」と回答した割合は93%だった。 ・廊下にラインテープを貼り、右側通行の徹底を図った。 ・依然として廊下を走る児童が見られる。 ・自由登校初日に通学路の見守りを実施した。 ・各学年で授業時数の適正化を図ることができた。	・各訓練については、今後も継続して取り組むとともに、事前事後の学習で充実を図る。 ・廊下を走らないための視覚的支援を段階的に実施するとともに、職員全員で粘り強く声かけを行う。	・廊下等にラインテープを張り、子どもたちに右側通行を働きかけることは大変良い取組である。 ・地域の公共施設でも、走り回る子どもがいるので苦慮している。引き続き、学校においても指導してもらいたい。

学校関係者評価総括

・主体的で対話的で深い学びが学習指導要領で指針されたのちの小学校学習活動では、児童(主体)が学習課題（客体）に対して、自ら進んで働きかけ、学びを深めていくことが望まれている。加えてウェルビーイングの向上には成果を出す力となるスキル(表層)と思考力(深層)といった自己磨きが必要となる。学校に課せられた課題は大きくて深い。私たち学校関係者もその理解に努め、思考パターンの学び直しが迫られている。

次年度に向けた重点的な改善点

・校内研究を意識した授業改善として、授業のユニバーサルデザイン化を進めるとともに、「書きたい」「話したい」を実現する場づくりの工夫に努め、意欲的な学習態度の育成を図る。
・授業が子どもたちにとって主体的で協働的な学びとなるよう、その土台を支える基礎基本の学力向上・学習習慣の定着に向け、朝学習や放課後学習の取組を充実させる。
・長期欠席者及びその保護者への関りを密にするとともに、サポートルームの支援体制の充実を図る。
・引き続き、ウェルビーイングを基盤とし、学校・家庭・地域が連携して取り組む。

自己評価の基準　**A**：目標を上回った　**B**：目標どおりに達成できた　**C**：目標をやや下回った　**D**：目標を大きく下回った